

# 大津 歴博 だより

企画展

2003  
No.49

## 大津事件

2月27日(木)～3月30日(日)

明治24年5月11日午後1時50分、日本は、試練のときを、迎えた



**大津事件関係資料** 写真手前が、津田三蔵の凶器となったサーベル。事件当日、現場近くの呉服太物商・永井長助家に難を避けたニコライは、店先の縁台に腰をおろしてハンカチで血を拭った。そのハンカチと彼が敷いた座布団（左手奥の木箱に入る）などの関係品が、今も残されている。

(滋賀県蔵、滋賀県立琵琶湖文化館保管)



大津市歴史博物館

# 「大津事件」

明治二十四年（一八九一）五月十一日、来日中のロシア皇太子ニコライは、大津遊覧の帰途、警備中の巡查津田三蔵に斬りつけられた。ニコライは軽傷であったが、大國ロシアの脅威に怯えた政府の閣僚たちは、刑法第一一六条（大逆罪）を用いて津田三蔵を死刑にしようと画策する。しかし、ときの大審院長児島惟謙は、同条文は外国の皇太子には適用されないとして、通常謀殺未遂罪で裁くことを主張。結局、大審院の裁判官らは、児島の主張とおりの謀殺未遂罪により、無期徒刑の判決を下した。これが大津事件の概要である。

本展では、ニコライが事件に遭遇するまでの足どり、現場の状況、関係者のその後などを、数々の未公開資料によって検証する。

●主な展示資料

大津事件関係資料 滋賀県蔵・滋賀県立琵琶湖文化館保管（巻頭カラー写真及び解説参照）

滋賀県には、このほか事件当時の津田三蔵他関係者の調書、巡查等現場配置図など貴重な資料が残されている。

勲八等白色桐葉章及びケース 個人蔵

事件当日、ニコライを助けた二名の人力車夫に対し、日露両政府から勲章と年金等が贈られた。写真は日本政府から贈られた勲章。漆塗りケースの蓋には篆書体で「勲八等白色桐葉章」と記され、桐葉章の裏面には「勲功旌章」の文字も刻まれている。なお同勲章の勲記、ロシア政府からの勲章と勲記も残されており、今回はそのすべてを展示する。



白色桐葉章写真

露国皇太子・故西郷隆盛肖像 山名隆三氏蔵

縦四〇・〇cm、横五五・四cm

ニコライ来日を前に、奇妙な噂話がひろまった。明治十年の西南戦争で死んだはずの西郷隆盛が実は生きていて、今度ニコライとともに帰朝する。そのとき、西南戦争で手柄をたて受勲した人々から勲章を取り上げるといっているのである。この噂は新聞で紹介され、錦絵まで発行された。西南戦争で負傷し、勲七等を受けた津田三蔵は、この噂を本



露国皇太子・故西郷隆盛肖像



事件発生当時の京町通

気で信じ、怯えたという。写真は明治二十四年五月五日付け東京中新聞の付録。その他、西郷にまつわる新聞記事や錦絵、事件現場を模写した新聞付録なども展示する。

事件発生当時の京町通 個人蔵  
縦一七・六cm、横二〇・八cm

事件から四日後の五月十五日、ロシアの軍人たちが事件現場を訪れ、周辺の町家に事件当日のようになり幕や国旗、提灯などをしつらえさせて写真撮



永井家名刺帳



向畑治三郎名刺

影を行った。中央の道路に見える三脚を立てた人物が、ロシア人撮影技師。事件現場を想起させる貴重なカットである。

永井家名刺帳 大津市指定文化財 個人蔵

事件後、同家に保管されていたニコライ使用の血染めのハンカチや座布団などをひと目見ようと、ロシアの高官や日本の要人たちが永井家を訪れた。主人の永井長助は、それら訪問者の名刺を二冊の名刺帳に仕立てた。ロシアの作曲家リムスキー・コルサコフや外務大臣青木周藏などに交じり、「勲八等」の肩書きを印刷した人力車夫向畑治三郎の名刺もある。

●その他の主な展示資料

- 津田三蔵滋賀県巡査志願書 個人蔵
- 津田三蔵勲七等緞章状 個人蔵
- 津田三蔵自筆書簡 個人蔵
- 津田三蔵西南戦争使用脇差 個人蔵
- 北ヶ市市太郎使用車夫衣装 個人蔵
- 明治秘史大津事件（歌舞伎台本） 個人蔵
- 膳所監獄平面図 滋賀刑務所蔵

★観覧料

一般六〇〇円、高大生五〇〇円、小中生四〇〇円  
一五名以上の団体、市内在住の六五歳以上の方・  
障害者の方は割引。

★休館日 三月三日・一〇日・一七日・二四日



## 近江八景

■平成15年3月11日(火)～4月13日(日)

近江八景は、江戸時代における日本の代表的な名所のひとつでした。

このように、現代の方々に説明しても、近江八景について具体的なイメージを思い浮かべることができない方や、実際に訪れて、いわゆる現代の観光地とのギャップを感じられた方は少なくないと思います。

現代人の我々にとっての観光地とは、基本的に現場主義です。現地に着し、今まさに身を置いている自分が重要であり、その自分が景色を遊覧・撮影し、さらに観光施設で娯楽(ごらく)をする。それらの体験・行為が目的といえるでしょう。しかし、江戸時代以前の名所に対する人々の考えは必ずしもそのようなスタイルばかりではなかったといえます。そもそも「などころ」である名所には、必ずその地名を詠んだ和歌があり、それに俳句や漢詩文が加わるケースもあれば、さらに、詩のイメージを描いた絵画作品や土地の伝承などが名所の情報としてセットで用意されていました。それらは、先人が築いたイメージ

の世界といえます。

人々はまずそのイメージの世界に遊び、その詩心や織り込まれた四季の情趣、または、風土の違いを味わい、しかるのち、チャンスがあれば当地に赴き、本人もそのイメージを共有する。それが、昔の人々が実践した、名所を何倍も楽しむ方法でした。ずいぶんと間接的で、予習の手間がかかる楽しみ方といえます。逆に言えば、文化的教養という予備知識は、実際に訪れた当該の季節・天候その他のギャップをカバーしてくれたとも思われるのですが…。

それはともかく、近江八景が、急速に往時の姿を失ってしまった背景のひとつには、名所を楽しむ文化的背景が失われるとともに、名所を憧憬する価値観も並行して失われていった現象があると思われまます。

かつて、湖国を代表する名所として多くの作品に描かれた近江八景。本展では、自然と文学をこよなく愛した日本人の伝統的な趣向を物語る収蔵品の数々を、これまであまり展示される機会がなかった作品を中心に展示いたします。

この機会に改めて、描かれた近江八景の世界に遊び、先人のイメージと情趣で名所を味わってみてはいかがでしょうか。かつての日本人がいかに近江八景を愛していたか、珍しい作品や、バリエーションに富んだ描かれ方をした作品がそれを物語ってくれます。



栄松斎長喜 栗津晴嵐 18世紀



土佐慶琢 堅田落雁 18世紀

### 「青い目の人形」歓迎風景―かた堅田小学校の様子

元号が昭和に変わったばかりの昭和二年三月、アメリカの子どもたちから日本の子どもたちへ、友情の印として「青い目の人形」が贈られてきた。

以前本誌No三八で長等ながら小学校所蔵「青い目の人形」

歓迎風景写真を紹介したが、今回企画展「大津の

小学校」を準備中、市内小学校から同様の写真が

発見された。堅田小学校の写真もその一つである。

同校沿革誌えんぎには、歓迎会の様子が詳しく記されて

おり、写真とともに以下紹介していく。

滋賀県には計百三十五体の「青い目の人形」が贈られ、うち大津市内へは十八体が配られている。

三月九日県公会堂で歓迎会と人形の配布が行われ、

堅田小学校の歓迎会は、三月二十八日に行われた。

「午後二時よりアメリカ児童寄贈人形歓迎会を雨天体操場に催す。正面に舞台を拵かまえ色幕を巡らし中央に寄贈人形を招待し、その左右階段には伴侶たがひとして本校児童の持参せる人形を飾り背景とす。上欄にはwell come (welcome) を額面に装飾して掲げ光彩を添へ斯くて舞台装置成る。」

まず校長が人形の由来を述べたあと、学芸会同

様子供たちが二十三の出し物を行っている。つづいて人形に添えられていた手紙が紹介されている。

「親愛なる日本のお友達の皆さんへ一筆申し上げます。私達アメリカの少女団員の仲間からこの

小さい紙片をさし上げるのであります。此のお人

形はメーリーリンカーンと申します。他国である

お国のお友達に会いたければかりに長い旅路をも大

へんに愉快ゆいに思っているのであります。私達少女

団員は熱愛をささげてこのお人形の衣服万端をと

とのへました。どうか皆さん私達が此の人形や又

この人形のお友達を可愛がってやつたと同じにメ

ーリールーさんを愛してやって下さい。私達はこ

の人形と大変面白く遊びましたから、此のお人形

のお母さんになってこの衣物を仕立ててやりまし

た。私達が日本のお友達を訪れるかはりに十組も

旅行団体の仲間を持った此のお人形を捧げるので

あります。皆さんメーリールーさんの無事に御国

着きましたなら皆さんがどんなにして此のお人形

を迎へ下さったか御知らせ下さいませ。お待ちし

ております。さようなら

皆様のアメリカのお友達のアイリーンハンコックより」

アメリカの子どもたちがどのような気持ちでこの人形を贈ったか、その一端が知れる手紙である。

写真とともに貴重な記録といえるだろう。

— (和田光生)



青い目の人形歓迎会（堅田小学校蔵）



## 学芸員のノートから 「街かどの広告展」の取り組みについて

今、博物館では、地域とどのように連携を深めたいかが課題となっています。普段から資料の調査等で、地域の方々の関係は深いものの、いざ展示となると、資料は地域と切り離され、お預りして博物館に展示するのがほとんどでした。本生夏の企画展「広告博覧会」にあわせて企画した「街かどの広告展」は、大津の広告関係資料を、博物館ではなく、地元に表示し、地域との連携の中で、街全体を展覧会場にしようと企画したものでした。

今回、この企画に参加していただいた展示個所は三二箇所。このうち、五箇所には、商店街のギャラリーや休憩施設にお願いし、「市内パビリオン」(小さな展覧会)と位置付け、博物館で収集・把握している市内の広告関係の一括資料を、商店については、各々で所蔵されている実物資料を店頭に展示していただきました。また、展示は各々で行なっていただき、場所をお借りするのではなく、主体的に関わっていただく方法をとりました。また、市内に点在する展示施設をつなぐため、現

地見学会や市観光協会主催によるスタンプリール(参加者は約八〇〇人)も企画しました。

商店や施設の方々は、積極的に資料提供や展示をしていただき、特に市内パビリオンについては、施設を運営されている方々が、創意工夫を加え、資料に登場する商店を落とし込んだ地図を作成されるなど、資料を十二分に活用していただきました。また、期間中のお越しになる方々に対しても、積極的に資料説明をしていただいたようで、観覧者にとっては、その資料が保存されている空間で説明を聞けるという、通常の企画展とは趣の異なる経験をしていただけたと思います。

準備期間が短かったこと、初めての試みであったことがあり、十分なことが出来ませんでした。が、今後も展覧会などに積極的に地域の方々に関わっていただき、より親しみやすい博物館を目指したいと考えています。

最後になりましたが、この企画にご協力いただきました関係者の方々に、あらためてお礼申し上げます。

(木津 勝)



地図上に示された引札



市内パビリオンの様子

大津歴博だより No.49  
平成15年1月20日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100  
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>